「井上家政学」における実践性と総合性

小林　陽子（甲南女大・院）

『家政学将来構想1984』では、「家政学は、家庭生活を中心とした人間生活における人間と環境相互作用活動の向上と共に、人的・物的両面から、自然・社会・人文の諸科学を基盤として研究し、生類の福祉に貢献する実践的総合科学であるとおよび規程し、これは、家政学の定義も新しい公式解釈であるが、科学として家政学の模索は、近代に欧米のギリス学校容認された。特に明治中期以降、家政学の模索つ、宮川（大江）スミが受入れ、井上秀子が留学して、わが国の家政学井上欧米イギリス問題を中心に「家政学・物的福祉の家政学」が模索された。

本研究は、井上秀（日本女子大学）によって構築された「井上家政学」を「実践的総合科学」の視点から分析することを課題とする。井上は、アメリカの科学的家政学のモデルを導入することにより、科学・学問としての家政学を構築する独自性を特に「実践性」と「総合性」の側面から解明することを目的とする。

成瀬仁蔵から「日本の家政学を確立すべし」と指示された井上は、コロンビア・ティーチャーズ・カレッジにて家政学を、シカゴ大学の総合的体系化に貢献した。井上は、「家庭管理学」人に関する諸問題を研究し、家政及び財政上の諸問題を包含する学問であり、人類の生存上のの概念を提示し、「家庭の行政学」をもって、種々雑多なる家政活動に関する社会科学と定義した。この「家庭管理学」として捉えた。の各論を統合する柱に、家政学を社会科学と自然科学からなる総合科学